

## 宝福先生の思い出

荻野 富士夫

宝福則子先生が大学を去られてからまもなく一年となるが、まだ大学のどこかで遭遇したり、研究室のドアをノックしてくれるような気がしてならない。宝福先生の大学における親密度からすると私などは十番以下であったはずだが、それでも私にとっては時々立ち話や研究室でのお茶をごちそうになりながらの雑談は、かけがえのない貴重なものだった。現在、そうした機会が乏しくなったなか、何気ない接点がどれほど大学での生活を人間味あるものにしていくかを実感する。

ドイツ留学時代の日本労働運動史に関する研究や『人文研究』に掲載されていた「日常生活史」というオーラル・ヒストリーについては、「歴史学」にも深くかかわるものであっただけに、今となってはもっと真面目に研究領域での交流をしておけばよかったと悔やまれる。ほぼ二〇年におよんで重なる在任期間中の立ち話や雑談の内容は、よく言えば大学全般や商大、そして学生のあり様であったが、大部分は大学内の噂話であり、研究や授業の面でのお互いの愚痴であった。

大学滞在時間の少ない私の場合、大学内外に飛び交う情報の摂取に疎く、大学改革にもなう重要な情報も、さらにそれに付随する逸話も、宝福先生から教えてもらうことが多かった。そうしたさまざまな情報が宝福先生のもとに集まるのは、何よりも宝福先生に寄せられた学内における厚い信望だったと思う。私は側面からわずかに垣間見る程度にすぎなかったものの、その信望が実感できただけに、お聞きする事柄はどれも有益で示唆に富むものだった。

とくに女性教職員のなかで、もっとも信頼する存在でありつづけた。それ

ゆえにハラスメント相談員や権利問題調整委員会委員などの公的な職務にあたっては女性教職員を代表するような意味合いを持たれていただけでなく、おそらく個人的な相談にも応じておられたのだと思う。新任の教職員にも積極的に声をかけ、女性をめぐる商大の研究教育・労働環境の改善を献身的に働きかけた。

また、学生、とくに夜間主コースの学生にとってのよき相談相手だったように思われる。相談するに足る教員であるかどうかの判断を授業を通じて学生たちは感じとったはずで、授業を離れても、あるいは卒業後も何らかの悩みや迷いを聞いてくれる数少ない教員となった。宝福先生の接する学生の実像を、私も間接的に漏れ聞くことが大いに参考になったことを記憶している。

こうした信望は、自ら求めて得られるものではない。その本来的な人柄と資質に加えて、日々の研究・教育面のたゆむことのない精進により、宝福先生はそれを獲得された。

私自身のことに関しても、そうした宝福先生のおかげで幾度となくピンチを救われ、励まされたことがあり、あらためてこの機会にお礼を申しあげたい。

必ずしもいつも体調万全ではなかったとお見受けする商大生活を終えられた現在、くれぐれも健康にご留意され、ご自身の研究のさらなる進展を願っています。そして、北海道の女性研究者にとって導きの役割を果たされることを期待しております。